



情報社会学部 情報社会学科 北市 記子(きたいち のりこ) 教授

テクノロジー×アートの融合で話題の「メディアアート」 その芸術表現、変遷から課題までを研究

■ テクノロジーとアートの融合で話題の「メディアアート」の芸術表現、変遷、課題などを研究。

北市記子教授は、テクノロジーとアートの融合による新しい芸術表現「メディアアート」の研究者です。「メディアアート」は、1960年代に登場した「ビデオアート」と呼ばれる電子映像を用いた芸術表現を起源として誕生しました。技術が進化した今日では、コンピュータ中心のデジタルアートへと変化、更にはAIやバイオテクノロジーなど最先端技術を応用したより複合的な表現も生まれています。日本でも、Perfumeの映像演出も手掛けるアーティスト集団「ライゾマティクス」や、様々なデータをミニマルな表現で可視化する池田亮司など、世界的に活躍するクリエイターを多く輩出しています。北市教授は、制作と理論研究の両面から、アートとテクノロジーの関係性、そこから生まれてくる新しい表現について研究を行っています。

■ 近年人気のインタラクティブなデジタルアート。メディアアートの表現の本質とは。

「メディアアート」的な表現として、近年インタラクティブなデジタルアートが注目を集めています。特にチームラボが手掛ける色彩豊かな作品は「映える」コンテンツとして知られ、国内外で大人気となっています。しかし北市教授は、プロジェクションマッピングが単なる集客のための「ツール」となり、先鋭的な表現に不可欠なクリティカルな視点が失われていることに危機感を感じています。また、かつて国の主導で開催された「文化庁メディア芸術祭」（1997-2022）で「メディアアート」の位置づけに混乱が見られたように、未だその確たる定義も定まってはいません。こうした現状をふまえながら、「メディアアート」の進化の過程を改めて分析し、“アートとは何か？”という本質に踏み込んで、その表現の可能性を展望していきたいと考えています。

■ メディアアートの先駆者・山口勝弘の遺品調査からメディアアートの「種」を発見。

北市教授が近年取り組んでいるのが、メディアアートのパイオニア、山口勝弘（1928-2018）に関する研究です。同氏は戦後間もない頃から現代アートの最前線で活躍してきた人物で、その歩みはそのままメディアアートの発展の歴史とリンクしています。現在はご遺族から託された遺品＝作品資料を手掛かりとして、アート・アーカイブの視点からさまざまな分析を試みています。またその一部をネット上で公開する「オンライン展覧会」をプロデュースしたり、未完の作品構想を具現化するなど、より実践的なコンテンツ制作の方法も模索しています。

北市記子教授 プロフィール

詳細はこちら⇒ <http://web.j8.osaka-ue.ac.jp/ouehp/KgApp?kyoinId=yuibgmgyggy>

1968年生まれ、京都府出身

経 歴：2005～2009年広島国際学院大学情報学部情報デザイン学科講師、2009～2012年静岡産業大学情報学部情報デザイン学科講師、2012～2015年同准教授、2015年～大阪経済大学人間科学部人間科学科准教授、2019年～教授

論 文：「メディアアートの先駆者・山口勝弘の思考と表現」（大阪芸術大学博士論文、2019年）

学会発表：「コミュニケーション・メディアとしての『ヴィトリヌス』」（日本映像学会第45回大会、2019年）

作 品：「Mount Fuji and Golden Cockroach - 富士山とゴキブリ」（日本映像学会第42回大会、2016）

受賞歴：第3回ふくい国際青年メディアアート・フェスティバル 買い上げ作品選出（1994年）

所属学会・団体：日本映像学会（関西支部幹事）、環境芸術学会

<本件に関するお問い合わせ先>

大阪経済大学 企画部広報課 高濱、東 Tel: 06-6328-2431 Mail: kouhou@osaka-ue.ac.jp

大阪経済大学 広報デスク（プランニング・ポート内） 福嶋、井上 Tel: 06-4391-7156

<https://www.osaka-ue.ac.jp>